
けっこん！

長谷川 神琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けっこん！

【Nコード】

N1090Y

【作者名】

長谷川 神琴

【あらすじ】

みんなはヴァンパイアと聞いてなにを思い浮かべるだろうか？ または弱点は？

ニンニク、十字架。聖水．．．これらを思い浮かべた貴方はやはりドラキュラのイメージが強いのだろう。

これは現代に残ったただ一人の吸血鬼の女の子の恋のモノガタリ。

Warning

表現がきつい場合があります。

出血や性的表現に抵抗がある方はご注意ください。

(この小説はケータイで投稿しますので、一回の文字数や漢字間違いなどはご了承ください。更新頻度は気が付いたらこまめに更新です。誤字脱字についても訂正などには時間がかかる可能性があります)

プロローグ

(This is a certain vampire's tale)

Once upon a time, the vampire was in a certain place.
The tale of the sad sad vampire who was passed by the vampire and became himself soon.

風の音が心地好い妖しい妖しい満月の夜。そんな静寂を破るかのように神月魔梨亜は駆け抜ける。

彼女の紅く妖しい瞳に映るのは、Only one person, the man who walks along a night journey...

刹那：瞬く間に男は倒されていた。
勝ち誇った笑みを浮かべながら男の首にがぶりつく。もちろん甘噛みなので重傷にはならないが…。
彼女の行っている行為をみた者はEveryone will be thrilled.

A red liquid overflowing from her mouth.

It is...血だった!!

始まり・第一話

ポカポカとした日差しが入り込む五月晴れの朝。こんな日の窓辺ほど酷なものはない。

「…これをいい天気だなんて言い出したやつは誰なんだ」

5月14日7時6分。連休明けの登校日。

まだ誰ひとりとしていない教室で魔梨亜がうだる。

まだ朝だと言うのに、都心と言うのはどうしてこうも暑いのだろうか。いやわかつてはいるのだが、単に自分が暑がりなのが原因だと決めつけ血を恨む。

魔梨亜の透き通った肌は誰もが羨むが、とてつもなく紫外線に弱く3時間もあたっていようものなら大火傷にいたる。また、目も陽射しには弱いのでいつも席は教室の隅だった。

朝は早起きで日が昇る前に登校し、日が暮れるまで図書室で暇つぶし。月の浮かぶ真夜中に買い物その他 *etcetera*。

…生活習慣化とは恐ろしいものだ。慣れてからかれこれ二年だが、そんな生活を送りながらも病欠は一度もなかった。

それに朝早い教室は心地が良い。昼間は体育館にせよ図書室にせよ、無能でうるさい男子どもが多すぎる。

「マリちゃんおっはよ〜！相変わらず朝早いねえ」

静寂を破り朝からテンションMAXの時雨琴音が私となりへとす

わ
っ
た。
た。

他のクラスメートもぽつりぽつりと増えて来た。

テンションあげあげの琴音に1限目の準備をしながら話しかける。

「そんなことないよ。琴音こそ今日もまた…?」

魔梨亜は呆れ顔で琴音の全身を眺める。

栗色のセミロングの髪はボサボサ。ぽつぽつと制服に着いている毛玉。ところどころ擦りむいて綺麗な血がでているのも目立つ。

「いやはや、犬と絡むのはやめられませんかね〜」頭の後ろをかきながら恥ずかしそうに呟く。

「あはは…。ムツクルは人懐っこいからね…」

ムツクルと言うのは、うちの近所で飼われている大型犬なのだが、魔梨亜や琴音がとおるとこちらの気も構わずタツクル（おそらく構って欲しいだけ）してくるのだ。

「マリちゃん今日暇だったら一緒にどう?」

私の身体を気遣ってか気まずそうに誘って来る。

「いいよ。日傘さしていけばなんとかなるだろうし」

「本当? やったー!」

琴音が無邪気にはしゃぐ。あんなに喜んでもらえると思わずこっちまで微笑んでしまう。

「よお、楽しそうだな。俺も混ぜてくれよ。なんてな!」

振り向くとそこにはクラスメートの磯田渉いそだしやうがたっていた。
突然のことに魔梨亜が思わず目を逸らす。

「磯田君、おはよ〜」

「おう琴音、おはよ。俺って神月に嫌われてんの？」 渉が悲しそうに質問する。「いやあ…マリちゃん男の子苦手だから」

「ちょ、琴音ちゃん。変なこと言わないでよ」魔梨亜が焦りながら訂正しようとするが、いざ渉がこっちを見ようとしたら思わず顔を逸らしてしまう。

「ははん。なるほどな、これは重症だな」

爆笑している渉を魔梨亜が冷ややかな目でみながら言う。

「まあ磯田、君もまた昨日C組の子を悪口言って振ったんだって？ それにこないだは一年の子も。評判良くないよ？」

「ぶはっ！ 急になに言ってる…」

「え、磯田君つてもてるんだね」

焦る渉とは裏腹に尊敬の眼差しを送る琴音。

「つまり、私が言いたいのはその気もないのにあんまり女の子と絡むのやめなよってこと」

「悪いかよ〜。今年は受験だしよ、彼女とかは大人になって責任とれるようになってからで良いかなって思ってるし。」

それに俺って男友達少ないからつい…」

いつものちゃらちゃらな言葉とは裏腹に真面目な言葉が飛び出した。

「わお。磯田君の口から受験や責任なんて言葉がでるなんて！」

「それどういう意味だよ！ まあ、そろそろ授業だからまたな！」

渉は軽く会釈すると窓辺の席に向かっていった。

「磯田ってよくわからん男だね…」

「あれあれ？マリちゃんの中から男子のことがでるなんて。もしかして好きになっちゃったの!？」

琴音がはつきりと言いくいことをずばずば聞いてくる。

「ふえ!？んなわけないでしょ!」

「顔紅くなってるよ？」

魔梨亜が「え」と声にならない声をあげて顔を隠す。

「ごめん、嘘!」「もう…ついてけない!」机に突っ伏したままため息をつく。

隣から琴音の笑い声が聞こえるが無視をする。

誰かさんのおかげで恥ずかしいやらなにやらで顔が紅潮をさせながら1限目の授業を迎えた魔梨亜だった。

「やっと終わった…」

魔梨亜は鞆を肩にかけると琴音の席に歩いていった。ショートホー
ムルームが終わり、遊びに行くことを今朝に約束したからだ。

この話しを持ち掛けてきた当の本人は机に突っ伏していた。

いままでの授業などはどうでもよさげに気持ち良さそうに寝ている。

「琴音、いつまでも寝てないで起きなよ。」

身体を揺するが返事がない。完全なる熟睡。

「…起きないみたいだから図書室行ってくるね」

意識のない琴音だが一応声をかけて図書室へと足を向ける。

………

学校の体制としては珍しく時間構わず開いている図書室。いつもの
ように1番隅の席にすわり、鞆から古びた本を取り出す。

…
うちの家系にだいたい伝わる吸血鬼について乗った本らしいのだが

…
どこの言語だかはわからず、家のものは誰も読めなかったが何故か
魔梨亜にだけは読めた。

意味はわからないが月がでるまでの暇つぶしにはなる。

「Da, HvMws, Frt... Gya, Ra」

適当に単語を頭に浮かんだ発音とリズムで口ずさむ。息をするまも
なく次のページへと進む。が、図書室の扉があけられ中へ数学の女
教師の田中聖架たなかせいが入ってきた。

「あれ、神月君…？なにを唱えて…」

私は先生には目をくれず唱え続けていると、急に目を見開き、肩を

揺すつてきた。

「待て！それ以上は読んではいけない！

「え？…ふああ！？」

聖架は急いでマスクを下ろし、その勢いで唇を重ねて来た。いわゆるキスだ。

私のファーストキスは先生によって意図も簡単に奪われた。

しばらくその体制のまましていると、やがて聖架の方から静かに離れた。

初めてのことにいまだに唇が疼く。やばい、くせになっちゃいそう

…。

「せ、せんせ…！」

「神月君。何故君のような生徒があのようなものを…？」

聖架が忌ま忌ましいものを見るかのように古ぼけた本を睨みつけた。

「え…。どういう意味ですか？」

「さつき君が唱えていたのは妖術の準備呪文だよ。それにその本。

一族の正当後継者にしか詠めないように呪縛がかけられているみたいだね」

聖架が当たり前のように話し出す。

妖術とかなに？呪縛？一族？

「その顔を見たところまだ自分の力を扱い切れてない見たいだね」

「あの、先生？」

「次の満月だ。次の満月の日に会おう。くれぐれもその本には触れないように。」

それだけ言い残すとなにごとでもなかったかのように去っていった。

、、、、

「ただいまあ……」
誰もいない家のなかに声をかける。

子供がいない親戚の叔父さんが学校に上がるときに買ってくれたマシヨンの最上階の部屋なのだが、魔梨亜の日々のだらしなさがでて、散らかしたままになっている。

最近是从兄弟も受験勉強で忙しくて全然遊びに来てくれない。

「はあ……疲れた」
制服のままソファーに横になり、つい夕方の行為を思い考えてしまう。

私の初めてのキスははかなくとも簡単に失われてしまった。
だが、痺れるようなあの感覚を思い出すと、再び唇が……舌が疼く。
ふと、自分の手を当てる。

「やつば……。なんでこんなに……」
いろいろと想像して罪悪感と恥ずかしさが込み上げるが、1度動かした指は止まらない。びしょびしょに濡れたそこを指は掻き回し続ける。

「ん……あつ。はあ……あんつ。駄目……だよ……くっくん……こんなことしちゃ……駄目なのに……」
指が止まらない。

やがてスパートに向かって息が荒くなる。

「んう……！……つぶはあ……はあ……はあ……」
最後まで昇りつめ、いまだに身体の震えが止まらない。

汗でべたべただ。

まだ怠い身体を起こしバスルームへと向かう。

シャワーの流れる音だけが聞こえる。

ふと鏡を覗くと気怠そうに壁に寄り掛かる私。だが、鏡の私は違っ
た。

果物ナイフを手にして、自分の指を斬る。

やがて自分の血を美味しそうに啜る自分が映し出された。気が付い
たら右手にはナイフが握られていた。

そして鏡の中の私の様に…

《アハハ。みいーちゃった》

突如響いた声に我に返る。「だ、誰？」

反射的に身体をかばいながら周りを見渡すが、なにも異常はない。

やがて鏡のなかの自分がこちらを見て嘲笑っているのに気が付いた。

《私？…私はマリア。貴方こそ誰なの？》

「私こそ魔梨亜だよ。なんなの？」

《べつつに〜。ただそろそろ私の日だからさ。順番は守ってよ？魔・

梨・亜》鏡の少女が指を振りながら言う。

刹那、、、私の目の前に暗闇が広がった。

The tale has just started、、、

偽物・・・第二話(前書き)

視点が一度変わります。

偽物・・・第二話

真夜中・・・

鈍い音ともに渉の腹に拳がめり込む。

「ぐっ……。やるじゃねえか」

予想していた以上の威力に思わず呻くが直ぐに相手の拳を力で抑えこみ、腕をねじる。

「な、抜けねえ。なんて力だ」

「ああ、お前程度が俺に喧嘩売るなんて10年早かったみたいだな」

5月14日16時25分

今年に入ってから毎日してきたように、参考書を手にとり必死に勉強する。

二年の後期期末からの成績が悪いと現在いる特別進学クラスから落ちると担任の池内から警告されたからだ。

最後の最後で普通クラスに落ちるわけにもいかないので渋々ながら始めた勉強だがくせになったがために毎日毎日続けてしまう。

「おい、お前。磯田渉だな？」

突然後ろから声をかけてきたのは、B組の不良を気取った成金だつた。

なにかと金を絡めて解決しようとする嫌みな奴。

「ああ、なんかよつか?」「ちょっと顔貸してくんない?」

そのまま裏路地へと連れていかれる。

「なあ…お前今朝さ、俺の魔梨亜ちゃんと楽しそうに話してなかったか?」

成金が不気味な笑みを浮かべながら呟く。

「はあ?なんで神月がお前みたいなクズと付き合い「いまは!」成金が指を指しながら俺の言葉を遮る。

「付き合ってないね。けどこれから僕のものになるんだよ!お金があればなんだってできる。」

ケンカ売ってんのかこいつ…。憎悪にも似た悪寒に襲われる。

「だからさ…目障りな君を殺しても事故死にすることくらい簡単なんだ!」

そう言い終えると、ナイフを取り出し、襲い掛かってきた。

現在。

最初の一発目は急だったので避けられなかったが、こんなスローな動きじゃ俺は殺せない。

力の限りねじりあげ、伸びきった腕。こちらはそれを前に肘を曲げたおつたまま振りかぶる。

「て、てめえなにする気だつ…………!?!」

次の瞬間、成金の肘から先があらぬ方向に曲がる。

「っひあ!?!ぎゃああああああ!?!」

この世のものとは思えない悲鳴が上がった。

「なにつて。間接ごと腕へし折っただけだよ。」
丁寧に説明していると、成金があまりの痛みに気絶してしまった。
「うち。仕方ねえ野郎だ」成金の懐からケータイを取り出し、そのままボタンを押す。

119

やがて救急車の音が響くのが聞こえるときには、渉はすでにいなかった。

、
(前書き)

前回の続きです

「っち。バカ野郎が」

行くあてもなく一人ただ夜道を歩く。

炭酸の抜けたコーラに口をつけ、一気に飲み干す。

いまだに殴る感触が手に残っている。殴りあうのなんて何年ぶりだろうか。

気が付いたら学校の校庭まで来てしまっていた。

「っ　　。こいつは重症だな」

ああ、俺はあいつのことを考えていたさ。認めるよ、俺。

さっきだってあいつのことを言われたからあんなに怒ったんだろうが。

いや、いくらなんでもこんなに考えていても学校には来ないはずだ。

ふと人の気配があることに気が付く。

「いやあああああああああああああああああああ！」
突如響く女の声。

刹那、あたり一面が静寂に包まれる。

「……………空気が変わった？」

涉は息をひそめながら声のした方へと駆けつけた。

「ははは。この吸血変態野郎が！良いざまだなあ！？」

そこにはなぜか時雨琴音が立っていた。手には包丁が握られている。

普通の彼女からは考えられないほど残酷な笑みで横たわる少女を蹴り飛ばす。

意識がないのか、少女はぐったりとしている。

カラント

思わず手に握っていた空き缶を落としてしまった。

「…誰だ？隠れなくてもいい！でてきやがれ！」

琴音がこちらの方向をにらんでくる。

鬼の形相で睨みつけてくる。

逃げるべきか…？

いや、男としてあの少女を見捨てるわけには……。ここで逃げたら俺もバカ野郎になっちまう！

「琴音。俺だ、そこでなにしてるんだ」

「磯田…君…？」

琴音が一瞬我に返ったような顔をしたが、すぐに鬼の形相に戻る。

「貴様。この私のことを呼び捨てにしやがったな！」

消えたっ！？と思ったのは一瞬だった。気が付いたら目の前に地面が近づいていた。

抵抗するもそのまま顔面から落ちる。

「せっかくだ貴様から処刑を行ってやるっ」

手に握りしめられた包丁の切っ先がこちらに向けられる。

ヤバイ。そう悟った時にはすでに遅かった。

へそのすぐ横あたりに冷たい感触が突き抜ける。それはやがて激痛

へと変わった。「っう　！」

「アハハハハ！」

血と痛みが止まらない。

彼女は包丁を指したままぐるぐるとかき回す。

「ぐああっ!!」

「痛いかな。助けてほしいか! さあ泣いてわびろ! そして靴を舐めるがいい!」

この変態サディスティック野郎がつ!

つく。このままじゃヤバイ。

ドンッ

とてつもない銃声が鳴り響く。冷たい鉄の弾が琴音を貫いた。

「ちい! くそがあつ。やりがったか!」

彼女が振り返るとそこには拳銃を握りしめた仮面の少女が立っていた。

「その人から手を離せ。次はその脳天ぶちまくぞ」

「アハハハハ! まあいい。今日のところはこれくらいで手を引きましようか。つぎこそ貴様の血を根絶やしにしてやる!」

琴音がそういうと真つ黒い闇が彼女を包み込み、やがて消え去った。最近のガキはどっからこんな言葉を覚えてくるんだ。

夜はもとどおりの静寂さを取り戻したが、渉は氣を失った。

。。。 (前書き)

魔梨亜へと戻ります

。。。

高揚にも似た感じと共に魔梨亜は裸のままベランダから飛び降りた。

自分を見付けるまで家には戻らない。そう心に誓ったのだ。

三日月の綺麗な夜だった。

もうひとりの自分が教えてくれたのは、私が吸血鬼だということだけだった。

情報が不足しすぎるのはいけない…。

やがて地面が近付くと静かに着地する。

私はいま無性に飲み干したいものがある。それがなんなのかわからない。魔梨亜ただそれを求めて走り出した

A n d . i t . c o n t i n u e s . t o . a . p r o l o g u e .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1090y/>

けっこん！

2011年11月3日02時08分発行